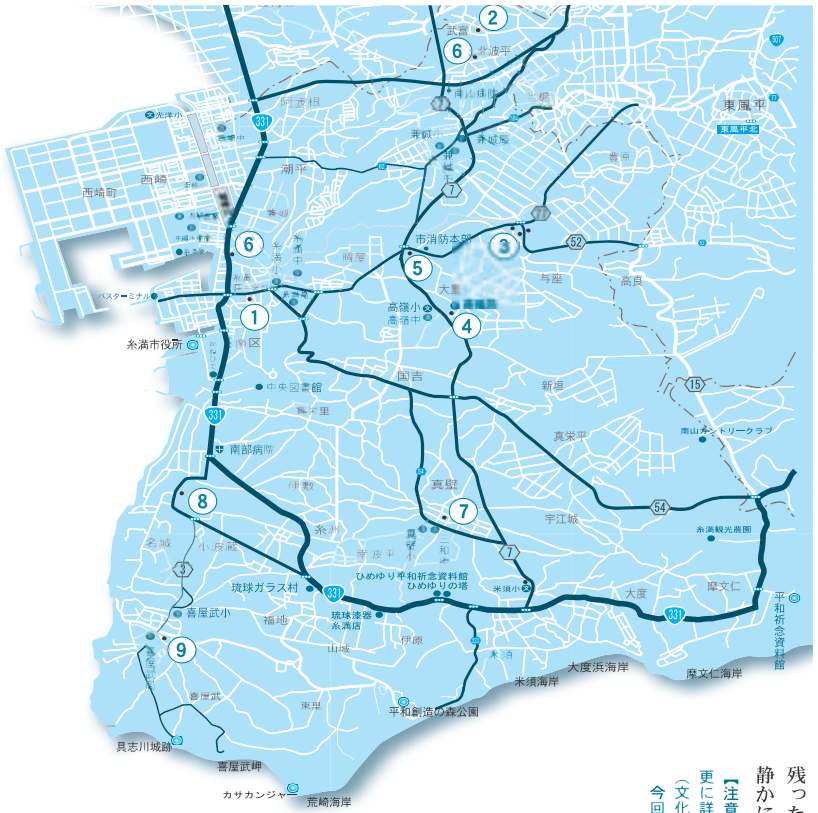
6月23日　慰霊の日　特集

市内の戦跡を歩く3

沖縄戦終結から今年で64年目の夏を迎えます。昨年と一昨年のこのコーナーでは、沖縄戦で使用されたガマや構築壕などについて紹介しましたが、3回目の今年は、沖縄戦の記憶を今に伝える遺構などの「モノ」をとりあげます。沖縄戦での破壊を免れ、さらに戦後の開発の波にさらされながらも現在に残った小さな「モノ」たちは、歴史の生き証人として過去の出来事について静かに私たちに語りかけてくれます。

【注意】昨年及び一昨年の「慰霊の日特集」記事は糸満市のホームページでご覧になれます。更に詳しい情報をお知りになりたい方は、『糸満市史　資料編7　戦時資料上巻』、『同下巻』（文化課で発売中）をお読みください。

今回紹介した場所には私有地も含まれていますので、見学には十分な配慮をお願いします。



① 新川区の街灯の柱

字糸満の新川区公民館近くにあるミーガーは、地域の人々の生活を支えてきた共同井戸である。そのカーの傍らに、高さ約3.6㍍、幅約18センチのコンクリートの柱が立つ。街灯をともすのに利用されたもので、「昭和十一年三月五日十八番組建立」と記されている。多数の弾痕があり、特に損傷が大きかった個所には戦後コンクリートで補修がなされている。

新川区公民館（新川区コミュニティセンター）の東約10㍍。

② 武富の国旗掲揚台

武富公民館の正面玄関横。高さ約90㌢のコンクリート製の国旗掲揚台。正面には「昭和十一年度建設　青年学校」と記されている。青年学校とは小学校卒の勤労青年を対象に産業技術の習得と軍事教育を施した旧制の学校で、1939（昭和14）年に義務制となった。

武富公民館（武富構造改善センター）の正面玄関横。

③ 弾痕の残る糖蜜タンクと門柱、工場跡

字与座の県道52号線と同77号線の交わる下与座一帯は、戦前は高嶺製糖工場の敷地であった。戦後、この工場跡地を与座区が購入し、新しい集落が形成された。現在、集落内には工場時代の糖蜜タンクや門柱、工場の建物跡の一部が残っている。糖蜜タンクには多数の弾痕が刻まれている。2個所に残る門柱のうち、県道77号線沿いのものは、戦後現在地に移して民家の門として利用しているものである。建物跡は現在も住宅として使用している。

いずれも下与座の集落内。糖蜜タンクは県道52号線沿い、門柱は県道77号線沿いと県道52号線沿いの2個所、建物跡は集落内にある。

④ 嘉手志川の碑

豊富な水量を誇り、現在も地域の人々の暮らしを潤し続けている嘉手志川にも沖縄戦の記憶を伝える「モノ」が残っている。嘉手志川の貯水池のすぐ側に立つ石碑がそれで、昭和5年から6年にかけて行われた灌漑整備事業を記念したものである。東に面する碑の正面にはいくつか弾痕があり、東の方角からの激しい攻撃にさらされたことを示している。

字大里集落内。高嶺郵便局より南西向け約80㍍。

⑤「軽便鉄道」の橋

字大里の糸満消防署近くに残る、三角定規を立てて向かい合わせたような格好をしたコンクリート製の橋。「軽便鉄道」とは沖縄県営鉄道の通称。戦前の沖縄には那覇を起点に糸満線など3つの路線があったが、沖縄戦で鉄道施設は破壊された。橋は軽便鉄道の歴史を伝える県内でも数少ない遺構である。

橋の残る一帯の土地は周辺の道路より低くなっていたので、盛土をして線路が敷設された。その盛土の下を流れる水路上にかけられたのがこの橋で、沖縄戦を経て現在に到る。

大里総合家具センターより南西約60㍍。県道77号線を横切ると農地が広がる。その農地を流れる水路上に橋がかかる。

⑥ 御大典記念碑

昭和天皇の即位を記念して立てられたもので、市内で御大典の文字がある碑は、字糸満の白銀堂と山巌毛、字北波平の拝所の3個所で確認されている。

白銀堂の記念碑（写真左）は1932（昭和7）年の建立で、高さ190㌢・幅61㌢・厚さ25㌢の大きな碑である。表には「御大典記念改築碑」、裏には「昭和七年中秋建立　白銀神社改築期成会」の文字がある。碑の正面に弾痕が確認できる。

北波平の碑は、カンサギという拝所の入口近くのデイゴの木の根本に立つ。碑の側面には「御大典記念の□」、「波平青年分団」、「昭和三年十一月植付」の文字が刻まれていて、即位を記念して植樹が行われたことを示している。＊□は判読不明の意

白銀堂は国道331号沿い、字糸満の白銀堂前バス停留所近く。碑は白銀堂の鳥居をくぐると左手にある。
カンサギは、北波平公民館のすぐ裏手。拝所に向かって右側に碑がある。

⑦ 真壁の金城家

字真壁では、沖縄戦でほとんどの家屋が焼き払われ破壊されたなか、三和村長金城増太郎の家である屋号「喜納」の住宅は奇跡的に戦火を免れた。瓦葺きの大きな家で、終戦直後は台所の裏座に村長一家が住み、他は全て役場として利用され、地域の戦後復興の拠点となった。建物の柱や梁には銃弾が貫通した跡などいくつもの弾痕が残る。

字真壁223番地。真壁バス停留所東側。茶処「真壁ちなー」のこと。

⑧ 名城の水タンク

字名城42番地に残る高さ約1.7㍍・横1.6㍍・幅2.2㍍の方形のコンクリート製の水タンク。戦前、ここには屋号「仲海勢頭」の瓦葺きの家があり、家には老夫婦が暮らしていたが、沖縄戦で二人とも地元で亡くなる。家屋も破壊され、四方に弾痕のある水タンクだけが残った。

国道331号を糸満方面から名城向け左手側。名城バス停手前の歩道沿いの屋敷。

⑨ 喜屋武のヒンプン

喜屋武の民家に残るヒンプン。ヒンプンとは門と母屋との間に設けられた目隠しの塀のことである。戦前この屋敷には瓦葺きの家屋があったが、沖縄戦で破壊され、このヒンプンと屋敷を囲む石垣だけが残った。8枚の琉球石灰岩からなるヒンプンには、砲弾が貫通してできた縦約10㌢、横30㌢の穴が残る。

喜屋武集落内